

音楽科教育法における ICT を活用した協働学習の促進

Promotion of Collaborative Learning by Utilizing ICT in the Course of Teaching Method of Music

杉山 祐子¹⁾

Sugiyama Yuko

抄録：大学における授業科目「音楽科教育法」の協働学習に ICT を活用することで、技能の向上と共同学習の促進について調査をした。デジタル教材からは、教室に居ながらにして質の高い演奏や指導を視聴することで、技能向上を目指す姿があった。また、グループワークにタブレット端末を活用したことで、指導者からの受動的な学習にはない、学習者自身の気づきを促し、さらにその気づきをお互いに伝え合う協働学習となった。さらに、録画映像を見ながらやり取りをしている仲間の様子を見ている他の学習者の視線から、まるで自分のことのように注視していたことから、他の学習者もやり取りに参加しており、結果として協働学習が促進されていることが分かった。今後の課題として、ICT の活用の際の指導者の役割の重要性である。それは、指導者自身が学びの目標に合った ICT の選択と活用をより理解し、かつ学習者の観察を怠らないことと言える。

キーワード：ICT 活用 協働学習 音楽科教育法 指導法

I まえがき

2019 年に全面移行された学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現に重点が置かれている。今回の改訂で示された教育の目標である 3 本の柱①「知識及び技能」の習得、②「思考力、判断力、表現力など」の養成、③「学びに向かう力、人間性等」(総則第 3-1)¹⁾について、教師や教員を目指す学生は、この目標を明確にイメージし、児童の育つ姿を描かなくてはならない。そのため、先ずはこの学習指導要領で示されている指導の在り方に実感を持つことは重要となる。

今回の研究において、特に③「学びに向かう力、人間性等」を重視している。これは協働学習の推進により培われていくものである。音楽においては、第 2-2 の内容の取り扱いに、「ア 音楽によって喚起されたイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図、音楽を聴いて感じ取ったことや想像したことなどを伝えあい共感するなど、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるよう、指導を工夫すること。」と新設された。このことから、教員養成課程において、仲間との協働学習を自ら経験し、教師の視点で音楽の表現力や協働の可能性を体験することが重要となってきた。

音楽の授業において、主体的・対話的な深い学びの実現に、情報機器活用はどのような役割を担うことができるであろうか。「ウ 児童が様々な感覚を働かせて音楽への理解を深めたり、主体的に学習に取り組んだりすることができるようにするため、コンピュータや教育機器を効果的に活用できるよう指導を工夫すること。」¹⁾とある。ここでは、効率性や蓄積の学びへの活用にとどまらず、アクティブ・ラーニングの実現の視点を持つ必要性を示している。残念ながら音楽技能では「お稽古」の概念が強く、指導者がお手本でありそれを模倣することを重要視してきた歴史がある。また、技能や経験の差が大きいことから、個別指導により時間をかけ技能を伸ばしてきた。しかし学校授業では 1 対多であり、短時間で児童一人ひとりの技能を把握し伸ばす教育は、教師 1 名の限られた時間内での対応は困難であろう。その補完を情報機器で行い、更には児童の自主的な学修を促すための ICT 活用は、一層需要が増加する。

情報機器に関して、音楽教育にはタブレット端末が適していると考える。なぜなら、座学ではなく動きを伴う学習が主となるからである。タブレット端末は、充電式で軽量、持ち運びが可能であり、画面サイズも教科書に近く、楽譜や図の確認に適している。小学生にとってはキーボードで文字入力しなくても操作が容易である。画面をタッ

1) 中部学院大学短期大学部 幼児教育学科

アップすることは、自主的な気づきや創造力に即応しており、学習の機会を逃さない。また、タブレット端末を紙の楽譜同様、譜面台に置いて観ることができることは特筆する点であろう。また、アンサンブルなどの複数人での共同作業においても、演奏姿の確認をみんなで同時に“覗き込み”が可能な点は、タブレットならではの機能にとらえられる。このように、学校授業において、学習者の一人ひとりの技能に教員が応じることや、共同作業の効率化は、教員の指導を補完することにも有効である。

音楽では「お手本」は欠かせない。また、良い演奏とはテクニックが先行するのではなくイメージが先行するものと言われている(井上直幸, 2000)²⁾。しかし、学習の初期段階でのイメージ構築は、楽譜を読むだけでつかむことは難しい。筆者はこれまで、タブレット端末を用いた自主学習教材を研究してきた(図1)。「模範演奏」を搭載したデジタル教材を作成し、保育者養成校でのピアノ授業や自主学習に用いた。その結果、デジタル教材を活用した年の練習量の推移をデジタル教材が無かった年のピアノ練習量と比較すると、学習開始早々から練習時間が増加した。分からないことが多くイメージも描けない学習の初期段階に、「模範演奏」のデジタル教材があることの安心感と、何度も繰り返し見て学ぶ方法は有効であった。音楽技能の習得は、練習意欲の動機づけが難しい。「模範」のデジタル教材は意欲面を支援し、学習開始直後から安定した練習構築に寄与したと判断された(杉山, 2011)³⁾。



図1 ICTによる教材

そこで、本研究は大学の授業科目「音楽科教育法」において ICT を活用することによって、学生の技能習得と協働学習がどのように変化するか解明する。具体的にはこれは、小学校教育職員免許に必要な授業科目「音楽科教育法」において、授業の個人の技能習得や集団の中で協働学習活動にデジタル教材やタブレット端末を活用することによって、チーム内での練習や協力関係がどのように変化するかを詳しく調査した。

II 調査方法

次の方法で調査・考察を行う。

1. リコーダーアンサンブルをチームで練習し、発表会を開催する。
その発表会に向けて、技能の習得と、チームで一つの演奏を作り上げるこの学習がある。その機会にデジタル教材提供とタブレット端末の録画再生機能を活用する。
2. 対象者は、A 大学教育学部 3 年生の「音楽科教育法」を受講している学習者 31 名。
3. 期間は、2017 年 5 月 25 ・ 6 月 1 日 ・ 6 月 8 日の 3 回 (各 90 分) の授業。
4. 倫理的配慮は、授業での記録として採取された内容を研究に活用する許可を、対象者全員に依頼する。その際にデータは個人を特定しない処理をし、写真は顔等が判別しない状態にして掲載すると伝える。その説明の上で、研究への活用の承諾を全員から得た対象者とする。本研究は、中部学院大学倫理委員会の承認を得て進められた(E18-0002)。

III 調査結果

III-1 リコーダーに関する事前調査

授業を始めるにあたり、学習者のリコーダーに関する意識調査と学習の目標を調査した。質問は、「リコーダーについて、あなたはどんな気持ちを持っていますか。」とし、回答は 8 段階の選択式とした。回答者は 30 名であった。最も多い回答は、「好き」で、約 3 分の 1 であった(表 1)。2 番目に多かった回答は「苦手」であった。この正反対の感情にはほぼ同数の回答が現れたことから、2 極化が見られたこの意識は、ほぼ小学校での記憶であり、10 年近くたっても鮮明に思い起こせるほど、小学校でのリコーダー活動は、児童の印象に深く刻まれていると推察される。

表1 学習者のリコーダーに対する意識 n=30

	好き	得意	楽しい	まあまあ好き	きらいではないが	苦手	きらい	苦手・きらい
人数(人)	11	2	2	1	1	9	1	3
割合(%)	36.7	6.7	6.7	3.3	3.3	30.0	3.3	10.0

「苦手・きらい」といった両方の負の感情を持った学生が3名いることに着目する。技術を要する学習は、自他ともに自分の力が分かる。特に「音」はだれもが聴いて分かるレベルでの評価があり、「苦手」、「人前で演奏したくない」の意識を持つことは否めない。しかし、主体的・対話的な深い学びに向かわせることで、「きらい」と意識してしまった要因が解消でき、次につなげる学習の姿勢を確立できるよう導くことが大切である。

「好き」・「得意」だった理由は、練習をたくさんして吹けるようになった達成感が、さらに練習に向かわせ、人前での演奏により、一層得意と感じる正の循環が見られる。記述の中には、少々の苦手さがあっても「好き」と感じられる部分もあった。「嫌い」、「苦手」の理由は、技術に触れた記述が多くあり、きれいに息を入れることが難しいことや、穴を指でふさいで音を出すことが難しかったことが挙げられていた。中には、「1人で吹くテストが苦手だった。」といった、人前での演奏が恥ずかしかったなどの記述も複数あった。しかし、苦手であっても、「めちゃくちゃ練習してできるようになったことがすごくうれしかった」といった成功体験が今でも残っていることから、苦手意識からの脱却の可能性はあることが示唆されている。このように、技術を伴う音楽の中でも、それまでに経験がなかったリコーダーへの取り組みは、授業の方法により児童の感情に大きく影響すると考えられる。小学校教員を目指す養成課程であるため、教育現場での音楽指導に立つことを想定すると、自身が苦手なリコーダーへの意識改革は重要となろう。

次に、学習者それぞれのリコーダー活動に対する目標について質問した。「好き」・「得意」な学習者は、「レパートリーを広げる」が3件、「みんなとハモりたい」が3件と、好きな活動の幅をさらに広げることを目指している。小学校でのよい体験を仲間と共有しようという前向きな姿勢がうかがわれた。「苦手」、「きらい」な学習者は、「吹けるようになる」の言葉が多かった。苦手な要因を、目標に定め再度挑戦しようという姿勢が見られた。小学校以来ではあるものの、再度挑戦してみようという意欲を持っていることが特徴的であった。しかし、「みんな」という言葉は1名のみで、まだ自分のことで精いっぱい他者との関係の視点は見られなかった。また、どちらにも共通の表出であった「子どもに正しく教えられるようにする」が見られたことは、正しい知識技能を指導できる力の必要性を意識しており、現場での準備と位置付けていることが分かった(表2 文末に掲載)。

Ⅲ-2 デジタル教材を用いた個人の技能向上について

授業の第1回(90分)を、リコーダーの「知識・技能の習得」とした。導入として、各自でまず吹いてみた。学習者は久しぶりに練習するリコーダーに様々な反応を示した。子どもの時より手が大きくなっていることから、リコーダーの穴をふさぐ感触の違いに、戸惑いが見られた。特に高音は穴の半分の塞ぎ方に困惑が見られた。次に、息のコントロールが難しい様子が見られた。感覚を忘れていたことから、子どものころはちゃんとできていたこととの違いに戸惑っているようであった。このような困惑の中、5分ほど吹く時間を設け、まず学習者の気づきを促した。短い時間ではあるが、学生たちはかつてのリコーダーを吹いていた記憶をよみがえらせ、現在の感情と統合して、事前のリコーダー意識と現実の意識との差を自己覚知していた。

その後、デジタル教材を提供した。『NHK for school』の音楽からリコーダーに関する教材(2分8秒)を全員で鑑賞した(図2・3)。内容は、プロのリコーダー奏者によるリコーダーの種類の紹介と模範演奏であった。学習者は、プロの演奏を聴き、リコーダーの奥深さを改めて理解していた。デジタル教材を使用する良さは、本物のすばらしさを教室に居ながらにして体感できることであった。音や演奏が美しいと思う気持ちは、自分の学習意欲向上につながる。また初心者にも理解しやすいような解説がつけられ、映像も多面的な角度やズームの活用で、生の演奏では理解できない構造まで提示されていた。学習者たちは、促されなくても教材に合わせ演奏する者もいた。以上のデジタル教材を鑑賞した後、再度リコーダーの①姿勢、②息の使い方、③タンギングの基本練習へ進めた。ここで、最初の5分間練習との違いは、デジタル教材の影響といえるであろう。特にリコーダーを吹く姿勢は、映像の影響が感じられた。このように、指導者が言葉で促さなくても、自分との違いをデジタル教材から自主的に取り入れていた。また、リコーダーの種類や音色を知ることにより、その楽器を取り巻く知識を広げることができた。このように、教室には揃っていない多種類の楽器の音や形を知ること、知識・技能の幅が広がり、目の前のリコーダーに対しても、音色や表現方法



図2 デジタル教材



図3 学習風景

に影響を与えていた。

デジタル教材によって、教室には用意できないより専門性の高い教材の提供ができた。もちろん、指導者が多様な教材を準備し模範演奏をすることは最良であるが、デジタル教材を用いながら、教師の視点による解説や指導を加えることで、相乗効果も期待できるであろう。しかし、注意すべき点もある。質が高くても、そのデジタル教材が現実の学習者のニーズに結びついているかという点に、注意を払う必要がある。その観点から、デジタル教材は、どのような内容のものをどのタイミングで活用すると効果的であるかを十分に考慮することが重要である。

今回は、学習の初めにまず自分で鳴らす体験をした。ほぼ全員が小学生依頼のリコーダー演奏であった。何も提供することなく自由に演奏してみることで、自身の感情や技術の課題を実感できた。これは学習指導において「楽器の演奏の仕方について教師が手順を追って説明することは大切であるが、とにかく音を出してみたいという児童の思いを尊重し、まずは音を自由に出して、音そのものを楽しむ時間を確保することも必要である。」と提案されている(有本真紀ほか、2019)⁴⁾。事前に学習者が自覚したうえで、デジタル教材を活用することで、課題解決のヒントを見出す機会になった。知識や模範演奏をはじめから提供する方法もあるが、実技に関しては、学習者の実感や気づきこそ最も重要とされる。まず今の自分を知ってから学習を開始することに意味があった。

Ⅲ-3 ICT 機器を用いた協働学習の促進について

Ⅲ-3-1 協働学習のチーム設定と学習方法について

2回目の授業は、チームによる協働学習とした。1回目で習得した技能を、複数の仲間とのアンサンブルで実践する。チームは1回目の最後に決めた。対象曲8曲に対し希望者で構成したチームのため、8のチームの人数は均等ではない。構成人数は、2名が1チーム、3名が3チーム、4名が2チーム、5名が1チーム、7名が1チームとなった。チーム内で2部に分かれた。担当のパートは、チーム内の学習者同士の話し合いで決めるよう指示した。アンサンブルでは、各パートの人数や技術のバランスは重要であるが、学習者はリコーダー技能の状況をお互いに知らない。そこで、これまでの仲間同士の認知により決めている様子であった。

練習は、チームごとに練習室の個室に分かれ80分行った。前述のように、「得意」、「苦手」の学習者が混在しており、チーム内で技術の差のみならず、モチベーションに差が見られた。その姿勢は「やりたくない」ではなく、「下手な演奏をすると恥ずかしい」と推察された。普段からお互いを知っている学習者同士であるがゆえに“照れ”も生じているであろう。

協働学習に関して、小学校学習指導要領の第2-2の内容の取り扱いに、「ア 音楽によって喚起されたイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図、音楽を聴いて感じ取ったことや想像したことなどを伝えあい共感するなど、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるよう、指導を工夫すること。」と新設された(前述)。この項目からも、「音楽科の特質に応じた」とある部分については、やはり演奏の姿、音の創り方が言語的な活動となる。なぜなら、音楽など個性の表現に関するコミュニケーションは、正解不正解を求めるものではなく、自己表現と他者理解が根底にあるためである。

Ⅲ-3-2 協働学習における ICT 機器の活用方法について

そこで、自己表現と他者理解を根底とした音楽科の特質に応じた協働学習の促進のために、タブレット端末の導入を行った(図4)。タブレット端末とスタンドを各チーム1台用意した。活用法は各チームに任せた。ただし、インターネットには未接続の状態とした。各チームの活用法は、主に練習の演奏を録画して、全員で確認することであった。録画に関して、「音はいいが、吹く姿を映したくない」という反応もあった。その対応として、演奏姿が映らないよう録画するチームもあった。



図4 協働学習の手順

50分間は指導者が巡回して練習の指導をした。その時間帯はまだ録画をする様子はなく、個人の練習と全体の流れの確認が中心であった。その後、チームアンサンブルの演奏に入ると、このタイミングで録画が始まった。その場で再生し、チーム全員で演奏の確認を行っていた。その後また練習をし、授業を終了した。

Ⅲ-3-3 協働学習の様子について

学習者自身で録画・再生ができるタブレット端末は扱いも簡単である。録画に関しては、一度通して終了ではなく、開始早々中止し、撮り直し撮影するなど、少しでも良い演奏を録画しようとする姿勢が見られた。演奏を確認

した仲間の反応はさまざまであった。リコーダーの演奏は耳の近くで自分の音が響くため、演奏しながら他人の音を聴くことは容易ではない。また複数人によるアンサンブルは、自分の音が聴きづらい、もしくは他者の音との区別が付きにくい。そのためチーム全体の演奏評価や、演奏中の修正が難しい。オーケストラ等での指揮者の存在は、指揮により全体の流れをけん引することや、各パートのバランスを指示している。そこで、指揮者や指導者が不在でも、仲間の演奏や自分の演奏、演奏の調和について確認するために録画・再生して仲間と確認することで、改善点など話し合っていた。また、録画にあたり、演奏の緊張感は平常より高い様子であった。この緊張感は、演奏会などの実際の人前での演奏時の緊張になれる機会とも捉えられる。このように、普段にはない作業と程よい緊張感とともに、思いや意図が伝わる演奏にしようという姿勢が表れていた。

Ⅲ-3-4 ICT 機器の活用による協働学習の事例

タブレット端末の動画は、止めて確認することができる。筆者のこれまでの研究で、ダンスのグループワークの話し合いの際に、映像が介することで、意見の客観性が担保され、助言する側もされる側も意図が通じ合っていることが確認されている(杉山, 2021)⁹⁾。音楽という音を伴う映像による協働学習の効果について検討した。器楽合奏の学習では、音が中心になることが考えられるが、映像と音の両面で、客観的情報として位置づけられるべきである。ここに、チーム内での学習姿勢の変化が見られた事例を述べる。あるチームの学習者は、始めは学習への姿勢が低く、明らかにほかの学習者と一歩離れた状態で参加していた(図5)。一度録画をして再生をした。チームの全員でタブレットの再生画面を見ながら話し合いをした。そこでは、再生を一旦停止しながら、「このリズムがずれている。」、「音のバランスがおかしい。」、「演奏姿勢が悪い」などの意見を、画面を指さしながら出しあっている様子が観察された。先ほどのチームから離れた態度をとっていた学習者は、興味関心が無いようにも取れたが、彼に他の仲間から再生画面を示しながら演奏について助言がでると、助言と併せて再生された自分の演奏をしっかりと見る態度を示した。画面に近寄り、自分の演奏や全体の演奏について考えている様子が見られた(図6)。この作業を何度もするうちに、その学習者は、他者の意見を吸収しながら前向きな姿勢に変化していった。彼の後の感想では、「自分の演奏が変わっていくことが嬉しいと感じた」と述べられている。



図5 グループ練習風景1



図6 グループ練習風景2



図7 グループ練習風景3

さらに特徴的であったのは、学習者間の視線の方向である。図6を見ると、①-自分の演奏を確認する学習者、②-タブレット端末の画面を示しながら意見を言う学習者、③-①の話を聞く学習者、④-①の表情を見る学習者が存在していた。この場面では、①と②のやり取りを他のメンバーが見ている様子がそれぞれの視線から判断できる。つまり、やり取りをする当事者以外の仲間も、タブレット端末の録画を通して情報を共有し、さらに他者理解をしている。この繰り返しにより、演奏の向上と共に、チームでの仲間づくりが促進していく様子が観察された。

別のチームにおいても、仲間同士の視線の方向を矢印で示した(図7)。リコーダーの得意な学習者(⑤)は、再生した箇所の演奏法を実際に吹いて示して助言している。助言された学生(⑥)は、隣で一緒に画面を見て演奏を耳で確かめている。⑥はその様子を、画面ではなく助言している⑤の演奏をじっと見ている。タブレット端末の再生で行われている⑤と⑦のやりとりを、⑥は自分の観点で学び、自分なりの発見をしている様子である。1対1以外の傍観する立場であっても、派生的な部分での協働学習が広がっていることが分かった。このように、ICTを活用することで、当事者以外の多様な学びに発展していると見られた。これは指導者が模範演奏を示す一対多とは違う、学生同士の学び合いとして成立している。これは、先に示した「音楽的見方・考え方を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを見いだしたりするなど、思考、判断し、表現する一連の過程を大切に学習の充実を図ること」(学習指導要領「音楽」第3-1(1)指導計画と内容の取扱い)の過程を大切にする学びと位置付けられる。

Ⅲ-4 学習後の意識調査について

3回目の授業は練習成果を示す発表会とした。終了後、意識調査を実施した。質問は「チームワークで録画した

ことによる気づきについて」として、回答は自由記述とした。回答者は22名であった(資料1 文末に掲載)。表3は、資料1の回答内容により3つの観点に分けた結果である。7割近い学生は「技術」に関する自由記述であった。内容としては、音の重なり、リズム、ハーモニー、バランスといった、アンサンブルの要素への気づきであった。いずれも「自分が思っていた音と違って」と感じ、客観的な評価ができたと述べていた。2名のチームがあり、人数の少なさから評価してくれる人がいないため、動画が事故を振り返る材料になったとの回答があった。中には、自分の下手さに関する記述もあった。「意欲」に関しては、「動画から自分たちの努力を感じ取った」、「演

表3 グループワークで録画したことによる気づきの観点 n=22

観点	技術	意欲	学び方
人数	14	5	3

奏姿勢が気になった」、「自信を持っている」などの気づきが述べられていた。また、「学び方」では、録画再生を繰り返すことや練習中に活用することで技術が上がるという、活用法の気づきも3名あった。

タブレット端末を活用することで、簡単に録画ができ、みんなで覗き込める画面サイズで再生することのメリットと、自分では聴くことができない全体の音を聴くことが可能であった。指導者に評価をもらう方法以外の、自主的な気づきを促す効果が見られた。

IV まとめ

リコーダーアンサンブルの技能習得とチーム活動に、デジタル教材とタブレット端末を導入した。デジタル教材からは、教室に居ながらにして質の高い演奏やプロフェッショナルな指導を視聴することで、意欲の高まりがみられた。質の高い教材を適宜用いることで、知識及び技能の習得や、学びに向かう力への動機づけに役立った。また、各チーム1台ずつ提供したタブレット端末を録画再生に活用し、チームの人数の多少にかかわらず、全員で演奏の確認をする姿が多く見られた。それは指導者からの受動的な学習にはない、学習者自身の気づきを促し、さらにその気づきをお互いに伝え合う学習となった。タブレット端末の動画は、止めて確認することができる。話し合いの際に、映像が介することで、意見の客観性が担保され、助言する側もされる側も意図が通じ合っていることが分かった。さらに、映像を見ながら説明をしている学習者とその相手の学習者の1対1でのやり取りの様子を見ている他の学習者の視線から、他者のことを自分のこととして注視していることが分かった。仲間のやり取りを傍観する他の学習者も自分の視点で参加しており、結果として協働学習が促進されていることが分かった。

今後の課題として、指導者の役割が一層に重要に練ってくることである。教師の観点として、①教材の質の高さと学習者にマッチしているか。②教材提供の適切なタイミング③依存ではなく自立に向けた活用であること。の配慮が重要である。この事例を通して、小学校での自己表現と他者理解を根底にした協働学習の重要性が認識された。協働学習を促進するために、指導者がICT活用をより理解し、かつ学習者の観察を怠らないことを目指したい。

文献

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領」, 2018.
- 2) 井上直幸「ピアノ奏法」春秋社, pp. 14-15, 2000.
- 3) 杉山祐子「ピアノ初学者のためのデジタル教材『映像テキスト』の実践と評価」全国大学音楽教育学会紀要 28, pp. 21-26, 2011.
- 4) 有本真紀・阪井恵み・津田正之「教員養成過程小学校音楽科教育法」教育芸術社, p26, 2019.
- 5) 杉山祐子「創造的パフォーマンス形成の支援に関する研究」中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要 22, pp. 1-20. 2021.

資料1 グループワークで録画したことによる気づき

1	吹いていると気がつけないミスや、重なり具合のズレに気づけてよかったです。
2	見て、テンポが合っていなかった部分はあったけれど、本番は合わせられていてよかった。
3	グループの頑張っている姿が録画に残っている事は恥ずかしいけれど見ることでよかったです。
4	録画を見てみると、合う時と合わない時があることが分かり、タイミング合わせることが大事だということがわかった。
5	微妙にずれているところや、リズムがおかしいところ、音が出しきれていない部分がわかった。
6	自分の下手さに、愕然としてしまいました。
7	音の強さの大切さが録画を見ていてわかった。主旋律より低音が勝ってしまってハーモニーがうまくいっていない。でも、低音もしっかり音を出さないと、かっこよくなることもわかった。
8	自分が吹きながら聞いている音のつもりが、録画をして聞くと客観的に見ることができ、自分の音の感じや、みんなの音のタイミングや、ずれているところがよくわかりました。
9	録画をして、うまくできていないところに気づいて練習をして、また録画をして直していくと、もっと良い演奏ができると思います。(活用の発展に気づく)
10	近くで吹いている音を聞くより、録画した音を客観的に聞いてみたら、上下のパートのバランスが案外バランスよく響いていることに気がついた。録画を見て、もっと気持ちに余裕があれば、もっと強弱記号などを意識してもよかった。また表情も硬くならないように気をつければよかった。
11	もっと自信を持って吹いてもよかったのかな、と思いました。
12	演奏のずれているところがわかって、次につなげることができた。
13	チーム全体として、今の現状を見ることができた。ハモっているところと、そうでないところがはっきりわかって、気をつける場所が明確になって良かったと思いました。
14	録画を見ると、姿勢や顔を上げて演奏すると、それっぽく見えるのではないかと思った。自分の姿を客観的に見ることができた、演奏する姿も大切だと実感できた。
15	演奏の姿勢と言うものを、見せるためには大事なことだと思った。
16	3人のハモリができていけるかがわかってよかった。
17	動画で見ることによって、どこか間違っているか、ハモれていないか、速くなっているかなど、課題が明確になった。
18	途中で見ることで次の演奏へ繋がられてとても良かった。
19	2人しかいなくて、客観的に評価してくれる人がいなかったのでも、自分たちで映像を見て考えた。
20	いきなり先生に見てもらおうと、緊張する。自分たちの映像を見ながら考えてから、ある程度できあがって、先生に見てもらおうことで慣れていった。
21	タンギングを意識して演奏することが大切だということがわかりました。主旋律の人数やバランスを考えることを映像や音を見て考えることができました。
22	音のバランスの難しさがわかりました。もっと工夫すればよかったです。

表2 リコーダーに対するこれまでの意識と今後の目標(自由記述) n=30

No.	意識	理由①	理由②	目標①	目標②
1	得意				
2	得意	高い音が苦手		全音域をむらなく吹けるようになる	いろいろな曲を演奏できるようになる
3	好き	でももう忘れた		完璧に演奏する	
4	好き	家とかでもよく練習していた		正しい吹き方を知る	いろいろな曲が吹けるようになりたい
5	好き	きれいに音が鳴ると嬉しい	低いドの音が難しい思い出	きれいに音を鳴らせる	
6	好き	楽器演奏が好きだから	小学校以来やっていない?	いろいろな人と合奏を楽しむ	きれいにいわれるようになる
7	好き	音楽・楽器演奏が好きだから			みんなとハモれるようになる
8	好き		低いドの音が苦手だった	上手に吹けるようになる	
9	好き	でもすぐ飽きる			
10	好き	人前で演奏することが緊張して苦手			
11	好き	吹ければ楽しくてよかった			いろいろな曲を演奏できるようになる
12	好き	得意ではなかったが、楽しかった		スラスラ演奏する	
13	好き	演奏することが好き	いろいろな曲が吹けるから	いろいろな曲を吹ける	
14	まあまあ好き			きれいに演奏できる	きれいに音を鳴らせる 子どもに正しく教えられる。
15	楽しい	楽しんでやっていたから		完璧に演奏する	リコーダーについて知る
16	楽しい	小学校の時、みんなで合わせて演奏するのが楽しかった	初めは難しいけれど、吹けるようになると嬉しい	いろいろな曲が吹けるようになる	
17	嫌いでないが	吹けると楽しい	指が複雑なところが速くと嫌	指を覚える	みんなとハモれるようになる
18	苦手	よく指をはさずことがあった		指をはさずミスをなす	みんなとうまくアンサンブルをする
19	苦手	音がかすかすになる	息の入れ方が下手	息の入れ方が上手になる	
20	苦手	きれいな音が出ない		きれいな音を出す	
21	苦手			きれいな音が出るようになる	
22	苦手	うまく指で押さえられない		全部の音をきれいに吹出す	
23	苦手	あまり上手に吹けないから		上手に吹けるようになる	
24	苦手	練習さえすれば大体の子は吹けるようになっていた気がする		基本的な吹き方ができる	子どもに正しく教えられるようになる
25	苦手			吹けるようにする	指が動かしせる
26	苦手	吹き方がついていけなくてめっちゃ練習してできた時、すっごくうれしかったことを覚えている		吹けるようにする	子どもに正しく教えられるようになる
27	嫌いだった	吹ければ楽しくてよかった	吹けるまでがとても嫌だった	吹けるようにする	
28	きらい・苦手	きれいな音が出ないから		上手に吹けるようになる	
29	きらい・苦手	1人でのテストが苦手だった	失敗が目立つから	失敗しないで吹ける	子どもに正しく教えられるようになる
30	きらい・苦手			普通に吹けるようになる	